

ELE 教育における「汎用スペイン語」

江 澤 照 美

“El español panhispánico” en la enseñanza de E/LE

Terumi EZAWA

1. はじめに

現在世界中で約 5 億人の話者を持つスペイン語¹⁾はその使用地域が広範にわたるため、語彙はもちろんのこと、音声・統語・意味上のバリエーションが非常に豊富である。この言語的多様性はスペイン語学の分野において現在に至るまで数多くの研究や調査の対象になっている。

しかし、多様性とは真逆の共通性に着目したスペイン語学研究は皆無ではないものの盛んに行われているとはいいがたい。さらに言えば、研究対象が共にスペイン語圏全域に関わるため、スペイン語圏内での言語上の共通性は言語規範の問題と同一視されがちである。

スペイン語普及を推進するスペイン王立言語アカデミア（以後、RAE と略記）はスペイン語の言語規範に関して最も信頼の置ける機関である。RAE はインターネットが普及し始めた 1990 年頃からネットを積極的に活用してスペイン語やスペイン語圏に関わる情報を発信し、語学研究や調査に欠かせないスペイン語テキストや辞書のデータベースを充実させた。これらの活動はスペイン語学研究に大きな変革をもたらした。RAE はネットでの発信を開始した頃からスペイン語圏の言語や文化の豊かさを示すため、言語用法や文化の多様性を尊重する姿勢も打ち出した。スペイン語の規範を考えるにあたって半島スペイン語から多くの例を引用し、その刊行物においてアメリカ大陸のスペイン語への言及が少なかった RAE が、20 世紀末以降スペイン以外のスペイン語圏諸国それぞれの言語規範をも尊重する姿勢を明確に打ち出したのは劇的な方針転換と言える。もとよりアメリカ大陸のスペイン語はスペインのスペイン語の方言とは見なされていなかったが、RAE の方針の変化が明らかになったことにより、スペイン語

圏全体として言語規範は一つではなく、国や地域ごとに言語規範が存在するという考え方が定着していく。

このようなRAEの方向転換を如実に示しているのがRAEの刊行物のひとつ『正書法』である。1999年版からわずか11年後に出版された2011年版では、1999年版には少なかったスペイン以外のスペイン語圏諸国の用例が増え、その結果として前版よりページ数が大幅に増加された。スペイン以外の地域の情報が充実することはスペイン語学習者や教育関係者にとって非常に望ましい事態であるが、他方で言語規範の多様化と呼べる状況が生じていることにもなり、教育的観点から新たな課題——この多様性に満ちたスペイン語圏の規範をどこまで教室現場で伝えるべきか——が生じることになったのである。

次章で述べるように、もとよりスペイン語圏内における言語の共通性をめぐる問題は言語規範の問題と必ずしも重ならない。そして、規範的な性格を持つ書物にさえ地域の言語の多様性についての記述が目につくようになった近年、RAEの刊行物からスペイン語圏全域にわたる共通性を見いだすことはより一層難しくなった。

スペイン語圏全域で共通性を持つスペイン語のバリエーションについては一応の名称が存在するが必ずしも広く定着している用語ではない。そこで本稿ではこれを仮に「汎用スペイン語」と名付けることにする。

スペイン語が地域的な多様性に富む言語であるからこそ、他地域のスペイン語話者とのやりとり際に相手に理解されにくい地域独自の表現はなるべく回避され、中立的な言い換え表現が使われることが予想される。ところが先述したように、この汎用性のあるスペイン語についての先行研究は数が限られていて、とりわけスペイン語非母語話者への教育に応用可能な指摘があまり見られないことに筆者は気づいた。スペイン語非母語話者への教育に応用可能な指摘があまり見られないことに筆者は気づいた。

本稿の主たる目的は現代スペイン語の中から「汎用スペイン語」と目される言語の実態を追究する方法を考察し、さらに日本のELE教育への応用に向けて問題点の整理をすることにある。筆者が最終的に目標としているのは「汎用スペイン語」とスペイン語圏の言語・文化的多様性の両者を融合させたスペイン語教育モデル構築であるが、本研究はそのための予備的な論考として位置づけられる。

2. 先行研究

「汎用スペイン語」は特定の地域にその使用が限定される言語ではなく、その全容に迫るためにはスペイン語圏全域の言語に存在する共通性に注目する必要がある。本稿では便宜的に「汎用スペイン語」と名付けたが、スペイン語としては *el español neutro*, *el español global*, *el español internacional* のような呼称があり、Wikipedia には *el español neutro* の項目が存在する²⁾。ただし、先行研究で言及される場合、*neutro* という語はしばしば“*entre comillas*”で表記され、その呼称が用語として完全に定まったものではないことがわかる。本稿ではまず *el español neutro* の先行研究を取り上げる。なお、先行研究の中には具体的な用例の記述が豊富なものもあるが、本稿はこの言語の全体像を把握することから始めるため、具体的な用例の検証や比較は行わず、先行研究の紹介においてもその研究が記述している言語的側面（例えば、音声面や語彙面など）を述べるにとどめることをあらかじめお断りしておく。

1997年にメキシコのカカテカスで第1回スペイン語国際会議が開催された。言語学者、ジャーナリスト、文士など言語のスペシャリストが一堂に会したこの会議のテーマは「言語とマスコミ」で、プレナリーセッションの分科会は書籍・新聞・テレビ・映画・テクノロジー・ラジオに分かれていた。ここで行われた発表のいくつかで *el español neutro* への言及があった。そのうち本稿では Millán (1998) と Petrella (1998) を取り上げる。

Millán (1998) はテクノロジーの分科会で発表された、ネット社会とスペイン語の関係についての考察である。当時から Web ページを通してスペイン語について発信していた Millán はスペイン語圏のすべての人々に対して情報を発信できるツールとしてのネットの影響力を察知していた。そして、この時に使われるスペイン語について、*«neutro»* と呼ばれるが *«común»* ととも名付けることができる、と *entre comillas* で述べている。情報発信者の意図としては選んだ語が「中立的」に捉えられることであり、そうなるために各国のことばに「共通する」語を選ぶ、ということで、Millán (1998) は捉え方の違いにより *«neutro»* または *«común»* のいずれかが使われると解釈している。また、*el español internacional* はウナムーノが使ったことばであるとのことである。

コンピュータがスペインでは *ordenador*、イスマノアメリカの多くの国

では *computadora* と異なる名称で呼ばれることは広く知られているが、Millán (1998) はマイクロソフト社がスペイン語では賢明にもどちらの語も使わず、「*equipo*」や「*PC*」という語を選んだという興味深いエピソードを紹介し、これを「事実上の規範」(*norma de facto*) と名付けた³⁾。そして、このような「指示されたスペイン語」(*el español «dictado»*) はスペイン語圏側で編集や制度上の介入を行わない限りネットの世界で普及する可能性が高いと指摘している。

上述の国際会議では映画の分科会で *el español «neutro»* を正面から取り上げた発表があった。フィクション映画の吹き替え及び字幕の言語に使われる *el español «neutro»* を研究した Petrella (1998) である。

Petrella (1998) はブエノスアイレス大学による「ブエノスアイレスのスペイン語」研究プロジェクトの一環としての研究で、主としてアルゼンチンにおける *el español neutro* の特徴を形態統語・語彙・意味の各側面から調査している。また、当地の言語の特性を浮き彫りにするために、他のラテンアメリカ諸国の吹き替え表現との区別や吹き替えと字幕翻訳の違いにも着目している。

第1回スペイン語国際会議より後にこの問題を取り上げた論考としては Llorente Pinto (2006) がある。Llorente Pinto (2006) はスペインにおいて *el español neutro* がどのように扱われてきたかという観点からこの言語の分析を試み、音声・形態統語・語彙の側面における特徴を指摘している。Llorente Pinto (2006: 1-2) によると、*el español neutro* がスペインでその存在を初めて意識されたのは1960年代で、メキシコやプエルトリコで制作されたスペイン語圏諸国向けの映画やドラマの吹き替えのための言語として認識されていたが、そこではスペインの観客にはやや奇妙に思われる表現が使われていた。1970年代になるとスペインで上映・放映する作品については半島スペイン語での吹き替えが行われるようになり、*el español neutro* は次第に廃れていき、今ではまれに古いアニメの吹き替えなどで生き残っている程度とのことである。1960年代より前の吹き替え事情については明らかにされていないが、少なくとも *el español neutro* はスペイン語圏全域向けの映像作品の販売のためという具体的かつ経済的な理由から生じた言語バリエーションであることがわかる。

以上の先行研究から *el español neutro* の変遷をまとめてみると、この言語は元来スペイン語圏全域向けの映画やドラマのスペイン語吹き替えとい

う商業的な目的により生み出されたが、やがて吹き替えは地域ごとに使われるスペイン語で行われるようになり、スペイン語圏全域に通じやすい言語としての *el español neutro* の存在感は薄れていった。すなわち現代ではもう古いことばということになる。しかし、Millán (1998) の論考により、ネットを通じての情報発信や受信の際に使われるスペイン語に共通性が見いだされる可能性があり、これが現代の新しい *el español neutro* になりうるということが判明した。

ここで、「汎用スペイン語」と標準スペイン語 (*el español estándar*) との関係について確認しておきたい。「汎用スペイン語」は他地域のスペイン語圏話者と相互理解が可能な言語を想定しているため、その表現の多くは言語規範に沿ったものと思われがちであるが、相互理解ができることが最優先事項であるため必ずしも規範的ではない。すなわち、標準スペイン語とは同一視できるものではない。

また、言語のスタンダードを問題にする場合に特定の地域や話者が使うことばを他地域やその話者のことばよりも「正統な」「きれいな」などと形容することでその優位性が示されることがあるが、「汎用スペイン語」においては各地域の言語に優劣の差をつけた評価が行われることはない。

ただし、この汎用的な要素を持つ言語全体に対するネガティブな評価は存在する。Llorente Pinto (2006) によると、吹き替えの言語として使われる *el español neutro* は不自然な標準語であり、専門家のチェックもされていないという理由により言語学者から批判されてきた。吹き替えに関わる翻訳者の資質については Petrella (1998) も問題提起していて、*el español neutro* がより現実在即したものとなり、適切な表現が選ばれるために言語学者が翻訳に関与する必要性を指摘している。

第2回スペイン語国際会議において Demonte (2001) は、標準スペイン語についての論考の中でスペイン語圏の話者が意思疎通をはかりうる言語を *el español común* と表現し、人は常に標準語を完全に話せるわけではないので *el español común* と標準スペイン語は同一ではないと述べている。周知のようにスペイン語はかつての宗主国スペインで話される言語のみをスペイン語圏全域の標準語としておらず、Demonte (2001) の他にも標準スペイン語については数々の興味深い論考があるが、本稿ではこれ以上立ち入らない。

以上が現在までに筆者が把握している「汎用スペイン語」についての主

な先行研究の概要である⁴⁾。

3. 「汎用スペイン語」の教育的活用のために

本稿が「汎用スペイン語」と呼ぶ言語は el español neutro のほか、複数の名称を持つことをすでに述べたが、どのような名称で呼ばれるにせよ、その誕生がスペイン語圏向けの経済及び広報活動と密接な関わりがあり、何かの普及を目的とした言語であるという実態に変わりはない。スペイン語圏全域に商品名や情報を効率よく伝えるために地域別の翻訳をするとコストがかかるので、経済的観点から翻訳に関わる人々が言語の多様性への対応よりも共通性を追求するのは当然のことと言えよう。

筆者が「汎用スペイン語」に興味を持ったのは、この言語の使用により日本のスペイン語学習者がスペイン語圏の様々な国の母語話者とコミュニケーションを取りやすくなる、あるいは日本の入門レベルの学習者に教える内容の見直しや改善につながる可能性があるかもしれないと考えたからである。しかし、前章で言及した先行研究はいずれも教育的観点からの考察を欠いていた⁵⁾。「汎用スペイン語」が生まれたのが経済上の理由であることから、先行研究に教育上のヒントを求めても必ずしもそれが得られないのは仕方ないことなのかもしれない。そこで、筆者なりに日本のELE教育における「汎用スペイン語」活用の可能性について考察を試みた。その結果、以下の二つの課題が浮かび上がった。

3.1. 口語と文語

まず、留意すべき最初の課題は、吹き替えや字幕に使われる el español neutro が不自然な標準語であり言語規範に外れる語法や言い回しが少なくないと評されていることである。口語表現が中心になるため、多くの観客が理解できるレベルの俗語が使われるのはある意味当然のこととも言える。しかし、教育面での活用を検討する場合、表現の意味内容や難易度を考慮する必要がある、特に口語表現の導入は慎重に行うべきである。そして、教育的活用を考慮する「汎用スペイン語」には口語表現だけではなく文章表現としても“neutro”なスペイン語を含めるべきであろう。すなわち、「汎用スペイン語」研究においては、Millán (1998) が示唆した、ネット利用時のスペイン語圏ユーザー向けの言語表出の分析を行う必要がある。

もちろん、文章語のスペイン語においても特定のユーザーにしか理解されないような特殊な語などは除外しなければならない。個人的見解として、教育に用いられる言語は全般的にその時代の言語規範に沿ったものであるべきだが、必要性が高いと判断される場合は規範に外れる表現であっても教材や授業で取り扱うことを許容してもよいと考えている。

3.2. 言語や文化の多様性

二つ目の課題は日本の ELE 教育の中でスペイン語圏の言語や文化の多様性を扱うことにある。広大なスペイン語圏に存在する言語バリエーションを知ることで私たちはスペイン語学習の醍醐味を味わえる。その一方で「汎用スペイン語」の追究とはスペイン語圏各地のスペイン語に共通性を見いだすことであり、言語・文化の多様性とはベクトルが正反対である。このような両者を同時に ELE 教育の中で習得できるような授業プランを組み立てることは容易なことではない。加えて、従来スペインのスペイン語が主として教えられてきた日本の ELE 教育現場でスペイン語圏の言語や文化の多様性を扱うことも比較的新しい試みである。

この課題を解く鍵となるのは CEFR 以後の ELE 教育界の動きである。複言語主義・複文化主義を標榜するヨーロッパ評議会が CEFR を策定し、以後スペイン国内の ELE 教育界でカリキュラムの見直しや教材改訂が相次いで行われた⁶⁾。CEFR 以前と以後に刊行された ELE の総合教材を見比べると、複言語主義者育成・生涯学習・協同学習など CEFR 以後の教材編者の狙いが新しい教材中のタスクや挿絵、自己診断用ミニポートフォリオなどから窺える。とりわけ CEFR 以後の教材が文化を機能・文法・語彙と同等に教えるべき項目として各ユニットで取り上げるようになったのは顕著な改革である。CEFR 以前には必ずしもユニットごとに文化関連項目が設定されておらず⁷⁾、そこで扱われている文化の多くはスペインに関するものであった。CEFR 以後の教材でもスペインの文化が扱われる比率が高いものもあるが、ラテンアメリカ諸国の文化紹介にページを割く教材も増えてきた。

言語の多様性については、スペインで刊行された ELE 教材の場合、多言語国家としてのスペインがほとんどの教材で紹介されるようになり、comunidad autónoma という語彙やカスティーリャ語以外のスペインの言語名が導入される。各言語の内容にまでは踏み込まないものの、それらの語

彙はスペイン国内の ELE 学習者にとって覚えておく必要があるだろう。ラテンアメリカに特化した ELE 教材は別として、*americanismo* についても数が膨大すぎるためにスペインの ELE 教材ではまだあまりページが割かれていないが、スペインと他の国の語彙比較という形で *americanismo* の用法が紹介されるケースがある⁸⁾。

CEFR 以後の ELE 教育界の変化の影響によるものか定かではないが、近年日本で刊行された ELE 教材でもラテンアメリカ諸国の紹介ページが増えた。ただし、文法シラバスの ELE 教材では講読で各国の紹介をする、すなわち文化知識として導入されるケースがほとんどであり、機能シラバスの ELE 教材のようにラテンアメリカの様々な紹介文に続いてタスクをこなすという構成にはなっていない。

スペインに限定せずスペイン語圏全域の言語や文化を紹介してその多様性を学習者に伝えるという近年の ELE 教育の傾向について、個人的見解としては望ましいことと思っている。ただし、教師に対して特定のレベルで何をどの程度まで紹介すればよいか具体的に示してくれるような指針は存在しない。カリキュラム作成の指針としてセルバンテス協会の *Plan Curricular* があるが、同書の各目録の用例は授業での導入項目を定めるための叩き台にすぎず、特に同書の文化構成要素に関する章の目録ではスペイン語圏全域の例を出すのは不可能という理由でスペインに関係する例しか出ていない。日本の ELE 教育について最もよく知っているのは日本の ELE 教師であるから、*Plan Curricular* の目録を参考にして教師自らが学習者に最適と思われる項目を定めるべきというのが同書の基本的な考え方である。したがって、スペイン語圏の言語や文化の多様性については同書の目録を参考にしながら教師が授業で取り扱う項目を自ら定めるという方法をとることが望ましい。

3.3. アプローチの方法

第2章で述べたように Petrella (1998) はアルゼンチンと他のスペイン語圏の国の吹き替え言語の比較を行うことで *el español neutro* の分析を試みた。スペイン語母語話者がこの種の研究をする場合、自国の用法を考察の中心に据え、他国の用法と比較するという手法を採用するのは当然のことであろう。筆者のようなスペイン語非母語話者がこの問題にアプローチする場合には同様の比較を母語話者とは同レベルで判断することはできな

いが、同時に「汎用スペイン語」の解明のために必ずしも Petrella (1998) と同様の手法を取る必要もないと考えている。スペイン語圏各国で流通しているスペイン語吹き替えの作品をできるだけ数多く、できれば同じ作品を資料体として入手するのは非常に難しい。仮に複数のスペイン語圏の国向けの吹き替えの資料体が入手できたとしても、その分析の結果得られるものがスペイン語圏全域でも通じる汎用性を持っているとは限らず、また、それぞれの例がバラエティに富んでいる場合、そこから「汎用スペイン語」的と考えられる表現を見いだすための統一的な基準を設定するのは困難を極めることが予想される。

地域によって使われる表現が異なる場合に中立的な表現を決定することの難しさを表す例として、Molero (2003) のスペインとアメリカ大陸のスペイン語における語彙比較を挙げておきたい。同書はスペイン・アルゼンチン・チリ・メキシコ・ウルグアイ・ベネズエラの6カ国における日常生活、文化・社会などの比較語彙集である。同書から例を取ると「車」を表す語彙は、

スペイン	coche	アルゼンチン	auto	チリ	auto
メキシコ	coche, carro, auto	ウルグアイ	auto	ベネズエラ	carro

である⁹⁾。Molero (2003) に見られる国別の使用語彙の違いは非常に興味深い、多様性の分布が語彙ごとに異なっているため、この種のデータから汎用的な語彙を抽出するのは容易なことではない。しかも、現実の世界では各国の語彙バリエーションではなく、第2章で Millán (1998) が例に挙げた「指示されたスペイン語」(el español «dictado») のようなまったく新しい語彙が汎用的であると判断され、普及する可能性もある。

以上のことから、筆者は国単位での語彙表現の比較よりもスペイン語圏全域に向けて発信されたネット上の文章を分析の資料体とするというアプローチに「汎用スペイン語」解明の手がかりを見いだしている。ネット上の文章には口語的な表現と文語的な表現のいずれも存在していて資料体として適切である。ただし、ネットの世界で動画も十分に普及しているとは言え、発音など音声面から「汎用スペイン語」の特徴を考察する場合にネット上のリソース活用が有効であるか予測が十分にできない点もあり、この点は今後の課題とする。

4. まとめに代えて

本稿が「汎用スペイン語」と呼ぶスペイン語は広大なスペイン語圏の各国各地域で日常的に使われている多種多様なスペイン語とは対極に位置づけられる。ある言語の多様性はその言語圏の豊かさの現れであるという見方をするならば、その逆の共通性への指向は語彙や表現の貧弱化への懸念を呼び起こすことになるかもしれない。しかし、筆者は「汎用スペイン語」を旧来の吹き替え用言語としてよりもコミュニケーションツールとしての利点を持つ言語として評価する。それと同時に、スペイン語圏各国各地域の言語的多様性も重視すべきであると考ええる。

この言語的多様性には文化的多様性も常に付随していることは言うまでもない。すなわち、筆者が肯定的に評価する「汎用スペイン語」とスペイン語圏の言語・文化的多様性の両方を融合させた「汎用スペイン語」教育モデルの構築が今後の筆者の研究課題である。

共通性を追求する「汎用スペイン語」をELE教育のツールにして果たして異文化間能力が育成できるのかという懸念がないわけではない。しかし、スペイン語の非母語話者が大半を占める日本でELE教育の学習者が授業時間の限られた中で最低限習得を目指すべきなのは、スペイン語圏のどの国でも、どの国の人と話しても大体通じるぐらいの言語運用能力と若干のスペイン語圏各地域の文化社会知識であると筆者は考えている。そして、複言語主義者が必ずしも完全に語学をマスターすることを目指さないのでと同様に、日本のELE学習者もスペイン語圏のすべての文化的知識に通じている必要はない。スペイン語母語話者の教師ですらスペイン語圏全域の万事について知っているわけではなく、スペイン語圏のような、広大で人種も文化も言語も多様性に富んでいる地域では誰もが完全な知識を持っていないのが普通である。各地域の特性などは現地の人々に尋ねればよいのである。すなわち、「汎用スペイン語」は人とのやりとりをスムーズにすることで異文化理解を促進する言語である。

本研究の課題はまだ多く残っている。3.2.で指摘したように日本のELE教育も文化的要素を教材に加え始めているが、教室で教えられるスペイン語は依然スペインのスペイン語が中心であり、またそうあるべきと考える風潮もある。今後の研究でこの点についても問題を追求していく。

注

- 1) Instituto Cervantes (2018: 6) のデータによると、母語話者が 4 億 8000 万人以上で、第二言語や外国語としての話者も含めると 5 億 7700 万人を超えるとのことである。
- 2) https://es.wikipedia.org/wiki/Espa%C3%B1ol_neutro を参照。
- 3) Millán (1998) を参照。Millán (1992) “El dinero de la lengua” en *Babelia*, suplemento de *EL PAÍS*, 10 de octubre. からの引用で、「Norma de facto」はその時に Millán がつけた名称である。
- 4) 研究論文以外の文献として、Arias (2012) は映画を題材としてアルゼンチンのスペイン語と el español neutro の関係について書かれたエッセイである。
- 5) Llorente Pinto (2006: 7) は el español neutro が吹き替え以外の翻訳や教材、情報分野に関わるところでも使われていると述べているものの、吹き替え以外の応用についての具体的な言及はしていない。
- 6) CEFR 以降の ELE 教育界全体の傾向分析については江澤 (2017) を参照のこと。
- 7) 江澤 (2018: 305) を参照。
- 8) 一例として、Edinumen 社の *Nuevo Prisma A1* p. 43 にスペインとアルゼンチンの住居紹介文があり、4 つの語彙比較がされている。
- 9) Molero (2003: 52-53) を参照。
(本研究は JSPS 科研費 JP18K00786 の助成を受けたものです)

参考文献および参考 web サイト

- Arias, Sebastián (2012) “El español rioplatense y el español neutro” en *El doblaje en Argentina*
<http://doblajeenargentina.blogspot.com/>
- Demonte Barreto, Violeta (2001) “El español estándar (ab)suelto. Algunos ejemplos del léxico y la gramática” en *La norma hispánica*, Actas del 2º Congreso Internacional de la Lengua Española, Valladolid
http://congresosdelalengua.es/valladolid/ponencias/unidad_diversidad_del_espanol/1_la_norma_hispanica/demonte_v.htm
- Equipo nuevo Prisma (2014) *Nuevo Prisma (Libro del alumno)*, Nivel A1, Edición ampliada, Edinumen, Madrid.
- 江澤照美 (2017) 「ELE 教育の近年の動向」『愛知県立大学外国語学部紀要』第 49 号 (言語・文学編)、53-69.

—— (2018) 「異文化理解のためのスペイン語教育」 泉水浩隆編『ことばを教える・ことばを学ぶ 複言語・複文化・ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) と言語教育』、南山大学地域研究センター、行路社、293-315.

Instituto Cervantes (2018) *El español, una lengua viva*, Informe de 2018.

https://cvc.cervantes.es/lengua/espanol_lengua_viva/default.htm

Llorente Pinto, M^a del Rosario (2006) “¿Qué es el español neutro?” en *Cuaderno del Lazarillo: Revista literaria y cultural* 31, 77-81.

Millán, José Antonio (1998) “El español en las redes globales” en *La lengua española y los medios de comunicación, Actas del 1^{er} Congreso Internacional de la Lengua Española*, día de emisión, 7-VI-97, Zacatecas, Vol. 2, 1247-1265.

<http://congresosdelalengua.es/zacatecas/plenarias/tecnologias/milan.htm>

Molero, Antonio (2003) *El español de España y el español de América Vocabulario comparado*, Editorial SM.

Petrella, Lila (1998) “El español «neutro» de los doblajes: intenciones y realidades” en *La lengua española y los medios de comunicación, Actas del 1^{er} Congreso Internacional de la Lengua Española*, día de emisión, 7-VI-97, Zacatecas, Vol. 2, 977-989.

<http://congresosdelalengua.es/zacatecas/ponencias/television/comunicaciones/petre.htm>

Real Academia Española (1999) *Ortografía de la Lengua Española*, Espasa Calpe.

—— (2010) *Ortografía de la Lengua Española*, Espasa.

Wikipedia “el español neutro” の項目

https://es.wikipedia.org/wiki/Espa%C3%B1ol_neutro